

# 共和国独裁官の死

f-bacon

広場にて

「ディクタートル、私を覚えていますか」

「覚えておりますとも。私は貴方の夫とともに初陣を飾ったのですよ。あの大勝利、凱旋のあとの宴ではみなで祝杯を上げ、そこで年かさの女たちに混じって給仕を務める貴方を、婚約者だと紹介されました」

「その夫も先の戦で亡くなりました」

「そうでした。実に残念な事です。しかし立派に義務を果たされた！」

「ええ。そして今度の戦で、あの人と私の息子が初めて出陣いたします」

「それはそれは。解りました、気にかけておきましょう」

「ありがとうございます、ディクタートル」

路傍にて

「ディクタートル、私を覚えていますか」

「覚えておりますとも。この度はまったく・・・」

「いいえ謝らないで下さい。敗戦の責任は貴方一人が負うべきではなく、また私の息子が死んだのも貴方一人の責任ではないのですから」

「そう言って頂けると心の重荷も少しは免れるというものです」

「聞きたい事は、この国はどうなってしまおうのかということです、ディクタートル。貴方はいまこの国の第一人者です」

「そうですね、ご婦人・・・戦には負けました。そして敗北のまま和議を結んでおります。ゆえに賠償金も払う事になります。領土もいくらか奪われます。つまりは・・・苦しい生活を送る事になるでしょう」

「そうですか、ディクタートル、それをこれから国民に向かってそのように言うのですか」

「仕方がありません」

「いけません、そんなことでは。貴方は全ての責任を負わされ、殺されてしまうでしょう」

「仕方がありません」

「いけません、この国を見捨てるおつもりですか」

「私のほかに優秀な者は幾人もおりました。私一人が敗戦の責めを負えばそれで済むのです」

「いいえ、ディクタートル。貴方は逃れようとしているだけです。この国を立ち直らせるという困難な務めから」

「・・・私は私のできる限りの事をしました。国民の裁きを得たいのです」

「それで貴方は満足かもしれません。しかしそれでは、何のために私の息子は死んだのですか」

「それは・・・」

「貴方はこう言うべきなのです、ディクタール。この度の敗戦は自分の責任であり、領土も奪われたが、しかし十年の後に復讐を果たすつもりである、と。苦しい日々になるが、十年を共に耐えてくれないか、と」

「そのような事を、それは空約束というものではありませんか」

「ディクタール、貴方ほどの経験豊富な指導者を失えばこの国は二度と戦う事ができなくなるでしょう。戦を起こす事もできなくなり、敵国に隷属したまま幾十年を迎えるうちに、従う事が定めとなり、誇りを失い、国としての形を失う事でしょう」

「仕方が、ありません」

「では、そもそも何のために戦ったのですか」

「・・・」

「ならば初めから戦などせねば良かったのです」

「・・・申し訳ない」

「謝るのであれば、なすべきことは解るはずですが、ディクタール。貴方はこの国の第一人者なのです」

官邸にて

「ディクタール、私を覚えていますか」

「覚えておりますとも。むしろ貴方が私と会うことを良しとしなかったのではありませんか」

「そうですね、その事については申し訳なく思います。夫と子の喪に服していたのです」

「なんと、十年もの間ですよ」

「古式の礼法に則ったまでです。夫たる男を亡くした者は二年の喪に服す、家長たる男を失った女は四年の喪に服す。夫を失ってすぐ後はあの戦があり喪に服す事が出来ませんでした。合わせれば十年となります」

「そうですか、貴方は貞女の鑑と言えましょう」

「ところでディクタール、人々が口々に噂をしているのを聞きました」

「なんでしょう」

「戦を起こすと」

「そうです。十年前の約束を果たすためです」

「勝てるのですか」

「解りません」

「・・・おやめなさい、ディクタール。貴方は戦を司るには正直すぎる」

「なんと・・・十年前の貴方の言葉を、昨日のこのように私は覚えておりますよ、ご婦人。私を有能な指導者と認めてくれたではありませんか」

「そうです、それは嘘です」

「なんですと」

「貴方は正直で誠実なお人柄。そして物覚えもよろしく、人の恩を忘れない。私などのことを覚

えているように」

「私をからかっているのですか」

「いいえディクタール、貴方は国を治めるに相応しいお方。ですが一つだけ、いえ、二つほど向いていないことがあります」

「それが戦だと」

「そうです。そして二つめは謀です」

「・・・なるほど。ではどうすべきだと思われますか。復讐の戦に向けて十年を過ごしてきたのです。そうして国民を励ましてきた。もはや止まる事はできない」

「貴方は亡命すべきなのです、ディクタール」

「なんということを」

「貴方が率いればわが国は必ず負けるでしょう。しかし十数年もの間の施政は公正であり、国民は貴方に心服しております。それは復讐という好餌があったればこそでもありました。憎しみは外へ向けられました」

「国を棄てよと」

「そうです」

「国を見捨てるなど仰られた貴方が」

「やはり貴方は善良なお人です、ディクタール。心から尊敬申し上げます。しかしこの戦に負ければもはやこの国は立ち直れない。勝つか、戦をやめるか。どちらにせよ貴方にはできないことです」

「・・・他に手立てはないのでしょうか。私はこの国を愛しております。この国の人々を、豊かな田畑を、緑なす山林を、恵み深き海原を」

「・・・」

「夜明け前に官邸の建つ丘へと登り、海を割るがごとき日の出を見、群れなし列をなす人々の訴えを聞き、戦いの術を習う若者たちを鍛え、数多いる職人たちの仕事ぶりを訪ね、そうするうちに日暮れを迎えて、朱に染まる山並みを眺め一日を終える。そうした事はもう諦めるほかないというのですか」

「・・・」

「なんということだ・・・なんということだ・・・たしかにそう、先の戦の大敗は、敵の計略を見抜けなかった私の責任、であったのだ・・・だからそう、私は国民の裁きを得ようと・・・  
ああ・・・」

墓前にて

「ディクタール、私を覚えていますか」

「貴方の墓は望みどおり、この丘に建てられました」

「長い間、貴方はこの国に尽くされた」

「賞賛さるべき忍耐です。顕彰さるべき功業です。戦を行わずとも、この国はかつての領土を取

り戻しました。それは全て貴方の下で蓄えられたこの国の力に拠るのです」

「戦の備えが万全なればこそ話し合いもできます。指導者が代わったことで敵国の態度も改まりました」

「後継者は、ディクタール、独り身で子もない貴方の遺書に従い、公正な選挙によって選ばれました。貴方が選ばれたときと同じように」

「貴方の遺書、この国への愛と自らの誇りと、そして国民全てへの信頼に満ちたあの美しい言葉の全ては、官邸前に石碑が置かれそれに刻まれるそうです。貴方の事跡は未来永劫、いつかこの国の命運が尽きるとも遺されていくことでしょう」

「ディクタール、正直で誠実で、人を疑う事を知らないお方」

「貴方は戦を誰か他の者に任せれば良かったのです。そうすれば貴方の地位は安泰でした。しかしこの国の浮沈は戦によって左右された事でしょう」

「許してください、ディクタール。私は貴方を信用していませんでした。ですが、尊敬はしておりましたよ」

「ですから、貴方の命を奪ったも同然の私も、ここで命を絶とうと思います。亡骸は無縁墓地に葬られてしまうでしょうから、一緒になる事はできませんが」

「・・・死ぬ事はなかったのです。亡命さえしてくれれば。私はそれをお助けするつもりでいたのに。ディクタール、誇り高いお方。私は愚かでした」

終